

教育・研究・地域連携の一体的推進事業 実績報告書

責任者氏名	石岡俊之	所属	作業療法学科
-------	------	----	--------

1 事業活動の実績報告について（2023年2月末）

「概要」

本事業活動「さいたま市における高次脳機能障害を有する若年当事者と作業療法学生との地域活動での協働からの学びの効果」は、さいたま市在住の高次脳機能障害を有している若年当事者によるグループ「ことのは」に本学作業療法学科学生が、アクティブラーニングを通して得た成果を基に運営協力者として参画した。

結果、参加学生は高次脳機能障害の当事者から直接、社会生活上の問題点を聴取できたことで履修していた高次脳機能作業療法学などで得ていた知識の理解が促進された。また、自分たちで企画、運営したときの参加者の企画に対する好印象が学生の達成感につながり更なる学習意欲へとつながった。さいたま市は、学生が作成した高次脳機能障害を理解する教材を今後の市の事業で利用できる環境を作ることができた。「ことのは」参加当事者は、教材作成にあたる質問紙調査や動画への意見の提出によって自身の高次脳機能障害への気付きへとつながる機会を得た。しかし、一過性の大学の参画であるため継続した事業支援ができる関係を構築できるように働きかけることが必要である。

「活動実績」

① 教員と学生がともに取り組んだ方法

- 1) レクリエーションの企画・運営：「ことのは」のレクリエーションを企画し実施した。
- 2) 動画教材の作成：当事者、当事者家族および地域住民への高次脳機能障害の理解促進を目的とした動画を作成した。

上記を実施するために質問紙調査および「ことのは」に運営協力者として教員とともに参加し、参加時の当事者の言動や行動を観察し社会生活を行う上での問題点と利点を抽出した。

質問紙調査項目：

1. 高次脳機能障害にて社会生活で困った出来事をひとつ教えてください。
2. 困ったことを解決するためにご自身で行ったことを教えてください。
3. 困ったことを解決するために周りの人が行ったことを教えてください。
4. その出来事は解決できましたか。（はい・いいえ・わからない の3件法）
5. 高次脳機能障害の中で理解を深めたい障害がありましたら番号に○を付けてください。（5つ以内）。
 - ① 疲れやすい。
 - ② やる気が起きない。
 - ③ 周りの人の声や動きが気になる。
 - ④ 電話の後でメモを取ることができない。
 - ⑤ 前の日に教えてもらった内容を思い出せない。
 - ⑥ 人の顔や名前が覚えられない。
 - ⑦ 怪我や病気をする前の出来事が思い出せない。
 - ⑧ 目的地までの行き方を覚えられない。
 - ⑨ 左右どちらかの人や物に気づきにくい。
 - ⑩ 言葉や物の名前が出にくい。
 - ⑪ 会話の内容が理解しにくい。
 - ⑫ 新聞などの文章が理解しにくい。
 - ⑬ 漢字が読みにくい、書きにくい。
 - ⑭ 人の顔の区別が付きにくい。
 - ⑮ 物をみただけでそのものが何であるかがわかりにくい。
 - ⑯ 出かけるまでの準備にかかる時間を見積もることが難しい。
 - ⑰ 予定と異なった時にどうしたらよいかわからない。
 - ⑱ 周りの人の感情がわからない。
 - ⑲ 思い通りにならないとイライラする。

を参加者に回答を求めた。

② 地域に根差した（教員と学生が地域に入り込む・地域住民と関わる）活動内容

「ことのは」：2021年度末からさいたま市高次脳機能障害支援センター主催で施行しているさいたま市在住の高次脳機能障害を有している若年当事者をターゲットとした当事者グループである。若年当事者同士のつながりを通して就労継続や就労先を獲得

できる能力を涵養することを目的として実施されている。1回の開催は1時間半で、内容は茶話会としてスタッフによるファシリテートによる参加者の近況報告が行われ、その後レクリエーション活動を2か月に1回の頻度で実施する。2022年度の参加登録者は11名で全6回実施された。

③ 教育・研究・地域連携との関連性

学生が当事業に参加することで得られる学びは、

- 1) 若年当事者との交流を通して、若年当事者の語りや行動から地域社会での活躍や生活のしにくさを学ぶことができる。
- 2) 生活のしにくさを解決する方法として若年当事者との協働で動画作成し、その活動を通して学生同士で議論する機会や若年当事者や学外協力者へ提案する機会を得ることができる。
- 3) 学外協力者には行政一般職、臨床心理士、精神保健福祉士、言語聴覚士がおり、彼らと事業を一緒に行う専門職連携を体験することができる。

があげられる。

若年当事者が「ことのは」に学生が参加することで得られる利点は、

- 1) 学生に自分自身の状況を説明する機会を通して現在の困りごとを改善し適切にできるようになったことへの気付きにつながる。
- 2) 動画作成作業における意見を伝えるなど学生の教育に関わる役割を持つことで、障害を持ってから得られにくい自己肯定感を体験することができる。

があげられる。

さいたま市が当事業に参加することで得られる利点は、

- 1) 参加学生に対して、さいたま市の高次脳機能障害に対する施策への理解を得ることができる。
- 2) 当事者、当事者家族および地域住民への高次脳機能障害の理解促進を目的とした教材を獲得できる。

があげられる。

④ 学生の主体的活動（アクティブラーニング）内容

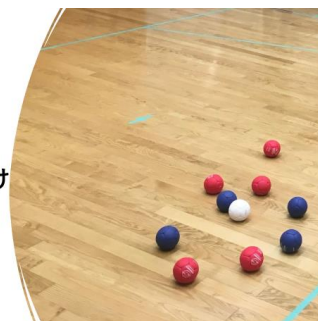
Project Based Learning を用いたグループワークを主としたアクティブラーニングを実施した。

Project 1：レクリエーション内容の検討

さいたま市職員からのレクリエーション内容に関する事前聴取内容と「ことのは」へのスタッフ協力者として参加した時の参加者の状況を基にレクリエーション内容をパラスポーツの一つである「ボッチャ」として、時間内で参加者が楽しめるようにルールの変更や説明方法を討議にて決定した（右図、説明時の資料例）。当日のレクリエーション運営も学生が主催で実施し司会や運営補助などを分担して実施した。

ボッチャ

どれだけボールを基準（白ボール）に近づけることができるかを2チームに分かれて競います。



Project 2：教材動画の作成

質問紙調査の結果と協力者として参加した時の参加者の状況を基に「ルールの理解」と「易怒性」を選出し、当事者、当事者家族および地域住民が理解できる視点を討議で決定して動画教材を作成した。動画作成に当たっては、動画前後に説明スライドを作成した点や台詞に字幕を入れるなどの工夫がみられた。

作成した動画は、「ことのは」で当事者に視聴する場を設け、意見を質問紙による自由記載で回答を求めた。その結果を学生にフィードバックすることで学修成果と更なる課題発見につながった。

⑤ その他（①～④以外の活動実績として記載する事項があれば記入）

「得られた成果」

教材動画：Project 2 の活動で作成した教材。

学 生：「ことのは」に参加し高次脳機能障害の当事者から直接、社会生活上の問題点を聴取できたことで履修していた高次脳機能作業療法学などで得ていた知識の理解が促進された。また、自分たちで企画、運営したときの参加者の企画に対する好印象が学生の達成感につながり更なる学習意欲へとつながった。

当 事 者：学生が参加することで高次脳機能障害を持つ自分たちのことへの理解につながる環境を経験できた。教材作成にあたる質問紙調査や動画への意見の提出によって自身の高次脳機能障害への気付きへとつながった。

さいたま市：本学との事業連携の拡充。事業で利用できる高次脳機能障害を理解する教材の取得。

「現状の課題と今後の展望」

さいたま市の高次脳機能障害当事者支援事業「ことのは」に作業療法学科学生が参画することが、参加学生の主体的学習につながり高次脳機能障害についての理解が促進されることが示唆された。当事者にとって学生の事業参画が、自身の障害への気づきへとつながることや自身の社会生活での悩みを第三者に気づいてもらえたことへの喜びへとつながる可能性がわかった。しかし、適切な検証過程を経ていない。今後は効果検証を含めた参画が必要である。

「ことのは」の長期的な目的は、当事者同士の互助へとつながる主体的な運営への発展である。この目的を達成するためには当事者自身に当事者の互助の必要性の理解を促進できる運営に務めなければならない。そのため事業の運営支援に大学として教員や学生が参画することがこの長期的な目的達成に貢献できると考える。しかし、現在の大学としての参画は一過性であり長期的な目的達成するための運営支援として不十分である。よって、さいたま市と大学としての協働事業としての発展に向けた運営支援の継続が必要である。